

博士後期課程への進学をご検討中の皆様へ

情報学プログラム 江本理恵

博士号は「足の裏についたごはん粒」といわれることがあります。「取らないと気持ち悪いが取っても食えない」という意味だそうです。

私のように博士課程に進学したものの博士号を取得できず、そのまま運よく大学教員になってしまった人にとっては、博士号をどうするのかというのは一つの大きな課題でした。大学での仕事は楽しくやりがいもあって、日々忙しく、それなりに学会等の活動もしていて、このままでも良いのではないかと。だけど、今後の大学教員としてのキャリアを考えると、博士の学位がないことがマイナスに働く可能性があります。大学での仕事に今まで以上にまい進したい気持ちと博士論文を書くべきであるという気持ちと、板挟みになっていました。

ここから博士論文を書くこと決めた転機の1つに、放送大学岩手学習センターの客員教員を引き受けたことがあります。毎年、面接授業も担当していましたが、様々な年齢や背景を持ちながら自発的に勉強に取り組む放送大学の学生さんたちと接するうちに、私も「足の裏についたごはん粒」を取って、気持ちよく大学で仕事をする未来を目指すことにしたのです。

博士論文の執筆は、自分との戦いで孤独です。3年という時間はとても短く、以前の私と同様、研究に専念したとしても博士論文を書けない学生が山ほどいることを知っています。指導教員とも、学士、修士までとは違い、自立した研究者同士の関係性が求められます。そして、一番大きな山が学術雑誌に査読を通した論文が掲載されることです。正直なところ、仕事と両立させるのであれば、入学する前に何らかの査読論文がある状態が望ましいです。一連のプロセスから学びたい、ということであれば、3年を超える長期的な研究計画を立てる必要があるでしょう。在学中は新型コロナウイルス感染症の影響もあって、同級の方に直接お会いする機会がほとんどなかったのも、研究室の先輩から伝授される博士課程生活のコツのようなものをお伝えすることができず、申し訳なく思っています。

博士論文を書き始めたころ、まだ学位も取得できていないのに、良いご縁をいただいて、大学を異動することになりました。そして、博士号を無事取得できたことにより、もう何も気にすることなく大好きな大学での仕事にまい進することができます。今までよりもはるかに広い北の大地で、大学の教育をより良くするための挑戦を続けていく、という新しいチャレンジを、私は手に入れることができたわけです。

さて。博士論文提出前に謝辞を書いていたら、涙があふれ出てきて止まらなくなりました。体の奥底からこれまで一緒に過ごしてきた方々への感謝があふれ出てくる。こんな深い感動を味わえたことは、これは50過ぎて博士論文書いた醍醐味かもしれません。決して楽な道ではありませんが、もし、何か心残りがあるのでしたら。ぜひ、博士課程に進学して、博士論文の執筆に取り組んでみてください。